孟 暉 の 作 品 世 界

徳間 佳信

1．はじめに

孟暉という名の作家の存在を知ったのは、徐坤のある小説集の後書きで、戴錦華の評言を目にしたのが初めである。「孟暉はその精緻で、ほとんど中国語に対する内省と再構築の筆記小説「有堂听雨」において、亡霊の出没する世界を構築している。」孟暉についてはこれがすべてなので、男性か女性かもわからない。八十年代末から九十年代に登場した作家が、陳染、遅子建、須蘭と順に紹介された後で、その名があげられていたのだが、その選定にたいした理由があるとも思われなかった。しかし、もともと私は幻想的な味のある小説が好きなので、その作品を読んでみたいと思うには、それだけで十分だった。その寸評の前段はともかく、後段は私に「聊斎志異」の現代版を期待させた。が、作家についてはもちろん、作品名も何もわからなかった。ようやく作品を読むことができたのは、98 年の夏、陳思和氏を彼の自宅に訪ねたとき、「その作家なら知っている。私の編集している『逼近世纪末小说选』にも、彼女の短編を一編入れました……」と彼が教えてくれたためである。

陳氏から教わった書店で、たまたまその本の所在を尋ねた客の、あんな大風呂敷を広げた（吹牛）だけの高い本云々、という悪評をよそに購入したシリーズ本の一冊に収められていたのが、彼女の「有树的风景」であった。主人公が数年前、迷い込んだ渓谷で見た巨木のある風景が、語りの現在で、主人公が目の当りにしている異国の美術館に展示されている絵の風景と瓜二つという驚き。その同じ風景が、さらに別の絵でもくり返し描かれている上に、画中画の中にも描かれ、その巨木の下の古い石碑の中にまで描かれている。そして、主人公がかつて巨木の下で見つけた古い陶片にも同じ風景が描かれていたことを思い出して、驚愕はさらに深まっていくという合わせ鏡を覗き込んだような世界が、独特な長いセンテンスで書かれていた。後に彼女自身が認めたボルヘスの影響も考え合わされるような、人と人の関係を中心に故事を構成しない、アンチヒューマニズム的な作品だった。それは、ある男と花瓶にかんする話（「苍华」）でも、死の床にある女性と蝶の話（「蝶影」）でも同じだった。背景となる時代や場所は作品ごとに異なっていても、可視の世界よりもむしろ不可視の世界を描こうという方向性は、他の短編でも一致していた。

その後、彼女は98年には中編小説「十九郎」を発表し、今年の一月には長編小説「盂兰变」を出版している。「盂兰变」ではこれまでの幻想性よりも人間関係の錯綜により比重を置いていて、作風に変化が見られる。以下、99年8 月、作家に会ったときに聞いたことや私宛の手紙の内容を交えながら、作家紹介をかねて作風を整理してみたい。

2．孟暉の経歴

孟暉は1968年4 月30日、北京で生まれている。本名も孟暉だが、これは彼女の父である作家の李佗のペンネームの一つ、孟輝にちなんで名づけられたと思われる。戸籍上は、モンゴル系の少数民族ダフール族であり、少数民族の二世作家ということになる。彼女は民族の故地である内蒙古や黒龍江で暮らした経験はないものの、作品の上では、例えば「十九郎」の密命を持った主人公、「盂兰变」の主要な登場人物・永寧は、ともに洛陽に暮らしている朔北の遊牧民族という設定であり、彼女が漢民族でないことは、見過ごしていい要素とは思われない。

87年に中央美術学院に入学、美術史を専攻する。卒業前の90年、パリのソルボンヌ大学考古美術学院に留学し、93年10月に帰国するまで、西洋美術史を学んでいる。彼女の作品に、絵画、陶器、刺繍、家具、服飾などの美術・工芸品が頻出し、時にはそれが人物以上に重要な意味を帯びるのは、その経歴からもうなづける。また、おもに視覚的なイメージによって作品を展開していこうとする傾向が強いのも、それと関連するものであろう。彼女の美術史研究の一端は、中国女性の歴代の服飾の変遷を跡づけた学術的な著作、『中原女子服飾史稿』によって知ることができる。

彼女はパリ留学時代に、ある種の内心の転機を経験したらしい。朱偉の「孤洁的恍惚」（『鍾山』94-1）と題する初めての孟暉論によると、彼女はその期間「パリとヨーロッパの一切に対して、ある種本能的な反発を抱いた」そうである。彼女は、「ヨーロッパの現在の文化は澱んだ水たまり」であり、「金銭、教育制度、テレビニュースなどの人類の創造した傑作は人類を袋小路に導いている。」と朱偉に語っている。私に語ったところでは、「ヨーロッパ人の、頭から自分たちの文化が優れていると決めつけてくる態度。異なった美の基準が他の地域にもあることへの無理解」に反発を覚えたのだという。それが大学での経験なのか、あるいはたとえばアルバイト先でのものなのか。また、フランス知識人の六四事件後の中国認識が影を落としているのか、あるいは彼女の個人的な経験により深く根ざしたものなのか、具体的なことは聞きそびれたので、よくわからない。「けっきょく西洋美術史の勉強は止めました。だから、留学ではなく、遊びに行ったのです」と彼女は言ったが、じっさいは大学にはあまり行かず、アパートで小説ばかり書いていたらしい。彼女の短編

は今までに七編あるが、大学生時代に書いた「夏桃」以外の六編は、この時期に集中して書かれたものである。それらは、帰国前にすべて『鍾山』と『収穫』に発表されているので、作家としては、幸運な滑り出しに属すると思う。

帰国後は、94 年から 98 年まで北京芸術博物館に勤務し、そのかたわら『中原女子服飾史考』のための準備と執筆をしている。機縁があったためと彼女は言うが、西洋美術史を断念した後の、学問上の本掛帰りに専念した時期といえよう。小説家として生きていくことへのためらいからとは本人の弁だが、この時期の小説執筆はない。

98 年、三聯書店の編集部に移り、それと前後して中編小説「十九郎」を『鍾山』に発表している。唐と思われる時代、果てしなく連なる冬の雪山で追っ手に追われている密使・十九郎を、梅の巨木の精と鳥の精が貴婦人となって現れ、救うという話である。それまでの作品における錯時法などの語りの技法は影を潜め、古代の服飾や鏡などの工芸品の精密な描写、たっぷりと幻想的な世界が展開されている点は、もっとも孟暉らしい作品である。帰国後、目の当りにしているはずの、ある意味ではヨーロッパ以上の拝金主義の蔓延、大衆社会化が、あるいは彼女が作品の上で、現在の中国社会といまだ向かい合っていない理由の一つかとも考えられるが、それはまだ直接確かめていない。私と会った 99 年の夏は長編小説を執筆中で、その梗概を話してくれた後で、「今度の小説は自信があります」と言っていた。それが 2001 年 1 月に出版された「盂兰变」だったわけだが、それについては後で論じたい。なお、その長編出版後に、彼女は三聯書店発行の雑誌『読書』の編集に転属している。

3．短編作品について

ここでは、今のところ最後の短編となっている「画屏」(『収穫』94-2) を取り上げてみたい。他のほとんどの短編と同じく樹木と画が主要なモチーフとなっていて、その意味で孟暉の特徴がよく表れている作品である。また、唐の時代を初めて背景にし、彼女が、自作ではもっとも気に入っているという作品でもある。

ストーリーは、それ以前のものよりやや複雑になっている。老画家は公主に依頼された十六双の屏風絵を描くため、画室にこもっているが、自分の才能が枯渇したと感じた。庭で、木連の枝に花が一輪咲いているのを見つけ、体が軽くなったように感じて、春の曲江へ散歩に出かける。そのほとりで、緑の幔幕が張り巡らしてあるのを見、松の木に上って見下ろすと、麗人たちが花影に集まっているのが見える。そのうち一人の麗人がショールをはずし、「柘榴紅色」のスカートを脱いだ。次々に何人かの麗人が同じようにし、侍女たちが様々な色のスカートを幔幕に掛け広げていく。彼は自分の画室に戻り、三日三晩、長

安仕女の春の野遊びの様子を描く。彼は春情盛んな少年のころに戻ったかのように、そのモチーフは新鮮さを取り戻した。「杏黄色」のスカートの麗人を中央に配し、それを取り巻くように他の麗人たちを描き終わると、疲れて画筆を置く。

画室の外で、彼は泣き声を耳にし、声をたどって寝室に入ると、生気のない老人が横たわっている。その老人は自分とそっくりだった。気がついたときには、自分が床に横たわっていて、その老人の姿はない。その時、弟子たちは、先生が気がついたと言い、三日前、彼は庭に倒れているのを発見されたのだと言う。また、誰もその間、画室には入らなかったと言う。画室に行くと、色鮮やかな屏風画が一同を驚かした。彼は中央の麗人が他を圧するほどに艶やかでないことに不満を覚え、そのスカートに流水紋と花咲く杏子の枝を描き加える。その後で、彼はまた倒れるが、その時、寒風が枯れて何年にもなる例の木連の枝を吹き折る音を聞く。

その後二ヵ月、彼は病臥する。その間に、屏風画は長安の街にセンセーションを巻き起こした。公主はそれを薬堂に据えて賓客たちに鑑賞させた。人々はうっとりと西方浄土に至ったかと思い、悲しみまで覚えた。ついには、画中のアクセサリーや服地の模様も都人士に模倣され、流行した。病中の彼は、自分の見たものは幻だったのかと考える。見舞いに訪れた孤雲禅師は、街では画家が妖術を使い、良家の子女の魂を屏風に封じ込めたのだという流言が広がっていると話す。彼は今までの経緯を話すが、禅師は、それは心の迷いから生じた幻だ、迷いがある限り、それがついには客体まで生じさせるが、けっきょくは幻に過ぎないと言う。彼はその夜、自分の一生を夢に見る。貧苦から身を起こして、成功した画家になり、才能の枯渇を自覚する一生だった。それ以来、病状は好転し、三月三日の上巳節の日に、禅師の許に赴き、幻が消えても何とも思わないと心境を語る。帰途、彼は二輌の緑色の馬車に出会う。貴婦人が野遊びに行くものである。彼は数ヵ月前の緑の幔幕を思い出す。帰宅して、木連の花が一輪咲き、枝から芽が出ているのを発見すると、すぐに城外に向かった。曲江は花見の宴の歌や笑いに満ちていた。彼は同じ緑の幔幕と馬を見つけるが、中を窺えない。そのうち、幔幕が侍女によって取りのけられ、色とりどりのスカートが現れるのを見る。彼は前のときと同じスカートを見、満足と失意のため息をつく。驚いたことに、それぞれのスカートには以前はなかった、彼が画に描きこんだ模様があった。そのとき、楽の音がそこからもれ聞こえ、熱い涙が彼の目から流れ出た。

本文は以上の要約のようには「見る」という言葉は頻出していないが、作品が視覚的なイメージによってほとんど占められていることが、これからもわかると思う。老画家の現実的な視覚と幻視、幻視を定着した屏風画、夢という幻視等が、とくに最後の場面がそうだが、現実か幻視かはっきりしないように展開されている。しかし、画家の幻視が逆に長安の街の流行を作ったり、最後の場面を、あるいは現実に生み出したりしたのかもしれな

いように、幻視の世界、ここでは芸術の力が肯定されている。そして、その幻視されたイメージは、緑の幔幕、緑の馬車、松の木、杏黄色・柘榴紅色のスカートなど、植物にかかわるものという特定の方向性を持っている。それが、木連の花の開花とともに現れ、その木の再生と画家の創造力のそれが重ね合わされて語られる。簡単に言えば、これが孟暉が初期の他の短編でも使用した、いわばディスクールである。これは、彼女が「私の小説観」(『鍾山』94-1) で述べたように「小説の主題は、けっしてD・H・ローレンスの類いだけに限らない」ことを実作で示し、「両性の関係を巡ってプロットが展開する形式を回避する」ためには、有効だったと思う。しかし、これでは逆に主題が限定されてしまうのではないか、たとえば複雑な人間の心理は描けないし、長編小説も書けないのではないかという懸念が、私にはあった。その懸念の前に実際に差し出されたのが「盂兰变」だった。

4.「盂兰变」について

原文で四十万字もの長編の委細を、残されたスペースで紹介するのは不可能に近いが、一言でいえば、則天武后の帝室の政変劇を軸として展開された幻想小説である。

武則天の孫の宜王は、毎晩、金色の蛇となって、とある離宮の小楼に住む美人のもとに通い、彼女の化粧や着替えを見つめる夢を見る。武氏の女を后とした宜王は、狩を口実にして、しばしば山野で親友の崔文徽、突厥族の貴族・永寧と李王室復興の密談を重ねる。そして、狩の一隊を率いて何度か洛陽郊外の離宮を捜すが、夢の中の離宮は見出せない。彼には、常に晴れない疑問があった。幼い頃に亡くなった両親の死因を知るものが誰もおらず、宜王妃も何か知っているようだが、話そうとしない。密偵に密談を知られた宜王たちは捕らわれて拷問を受け、宜王妃に救われて一命を取り留める。

離宮に住む柳才人は機織りに秀でているため、武則天の七十の賀に献上する式服の製作を任され心血を注ぐ。ある時蛇がくわえてきた見たこともない金糸を見て、それをたくさん持ってくるように言いつける。宜王は別荘の一角に工作室を設け、そこで波斯（ペルシャ）の金工と通訳（突厥の密使）と毎日こもり、金糸の製作に没頭する。突厥の力を借りて政変を起こす謀議が成立するが、宜王はなかなか決断しない。以前から宜王妃と密通していた永寧は、それを宜王に知られて乱闘になり、彼に怪我を負わせて、朔北の草原に流される。崔文徽は武氏の女と政略結婚をし、武則天に抜擢されて側近となるが、宜王は深夜、文徽が彼女の寝所に入っていくのを見る。このようにして三人の親友の間には、修復できない亀裂が入る。武則天の七十の賀のとき、彼女が宜王の作った金糸と孔雀の羽が折り込まれた式服を着ているのを見て、宜王は驚く。

ある夜、文徽はクーデターを決行する。宮廷の門を突厥の兵で固め、各所に火を放ち、

武則天に退位を迫り、宜王に帝位につくよう促す。それは成功したかのように見えたが、宜王は文徽を突然斬り殺す。

その後、宜王は柳才人の住む離宮へ勅使として赴き、二人ははじめて互いに何者であるかがわかる。彼女は宜王の父の后の一人であった。彼女は彼に、彼の両親がクーデターを企てたために、逆に武則天に弑されたことを教え、遺体が埋められている場所も教える。宜王が遺体を掘り出した後、彼女は陰謀を密告したのが自分であり、それは彼の母への恨みのためであったと明かす。手には刃が握られていた。宜王は、自分たちは来生で結ばれよう、どこにいてもあなたを必ず捜し出すという。その直後に、二人ともそれぞれ自刃する。

非常に大雑把にまとめると、以上のような筋建てだが、これではあまりに脱け落ちた要素が多いので、中国の『書評周刊』(2001.3.15) に掲載された私の書評によって、それを多少補いたい。(原文を少し整理した。)

(前略)「盂兰变」にはこのように多くの要素があるが、これらは空間的な秩序にしたがって整理すれば、理解しやすいと思う。私の理解によれば、作品世界は次の通りである。

①武則天の支配している宮廷(政治権力の中心であり、すべての対立を生み出す中心)
②宜王府(①と密接な関係をもちながら、対立を含む世界)
③①、②を含む神都・洛陽(政治の世界の観客と演じ手が住む世界)
④洛陽を包む森林(宜王と親友たちが相対的に自由でいることができる世界)
⑤柳才人が幽閉されている九成宮(かつて権力に背いた人間が葬られたり、生きながら埋葬されているような世界)
⑥突厥族の住む草原(永寧が流された世界でもある)
⑦吐蕃、波斯などの異国(国際関係や文化に影響を及ぼしている周縁。政権からもっとも遠い地でありながら、かつ⑥と同様政権を脅かしている世界)

このように整理すると、①から⑦に行くにしたがって権力の中心から遠ざかり、したがって、なぜ宜王が③以後の世界に心が向いているのか、なぜクライマックスの場面で主要人物が①に集まるのかなどがわかる。つまり、「盂兰变」は、①と②の世界の対立を機軸にして、それに③から⑦の世界が有機的にかかわって成立している世界である。これは、伝統的な中国の政治的宇宙にほかならないが、この作品の世界はそれだけではない。それに加えて、宜王の夢の世界、つまり、彼の母の堕ちている地獄の世界(宗教的な世界)と、柳才人のところへ蛇となって通う幻想の世界(芸術とかかわる世界)がある。いわば、政治的な水平な空間の宇宙に、幻想の垂直な世界が加わ

って、「孟兰变」は成立している。この小説のすぐれた点は、「清明上河図」のような当時の風俗絵巻を描くとともに、このような政治的・幻想的な「孟暉宇宙」を構築したところにあると思う。

しかし、作品は政治世界に対して、幻想的な世界を十分に対置しえていないのではないか、両者はバランスを失しているのではないかと思われる。というのは、幻想的な世界は政治的な葛藤を描いた部分に比べると、量的には五分の一にも満たず、両者は同じ比重を持っているとは言いがたい。また、内容的にも蛇となった宜王と柳才人は、話らしい話ができないし、心理描写もないので、互いに相手をどう思っているのか、読者にはほとんど伝わらない。それなのに、最後の場面で、宜王に「来生で結ばれたい」と言わせるのは、唐突で一方的ではないだろうか。彼の言う「機織り女」や「金工」、「高麗」や「波斯」というのは、権力の中心から遠い存在という意味であり、その意味において、この場面は凄惨な政治世界を相対化する上で作品全体でも重要であるが、それが重要性を発揮するには、事前に十分に二人の関係、彼らにおけるその意義を描かなければならないと思う。」

これに続いて、人間関係における絶望を描こうとした意図と、そこにこの作品の現代的な意義があることは理解できるが、主人公宜王が人間的な魅力に乏しいため、読者が共感しにくいこと、視覚的な描写が圧倒的に多く、心理描写と説明が少ないため、理解しにくい箇所がいくつかあることを短所として挙げた。

しかし、幻想的な世界が十分に政治的世界に拮抗しえていないというのは、あるいは的外れな批判だったかもしれない。孟暉はむしろこの作品で、従来の芸術や美、幻想性といった価値の過大を否定し、その現実における無力を描こうとしたのかもしれないと、いまは思っている。というのは、彼女は「私の小説観」において、すでにこの作品を予告するような内容を書いていたからである。「それ以外に、その他の諸々の疑問と反逆したい気持ちが、私の習作の過程の中で働いていた。それらの疑問は、『五四』以来打ち立てられてきた人間・世界・文学・文学者にかんするワンセットの神話（嘘）に向けられている。随意に例を挙げると、自由・反逆・愛の永遠性・芸術家の個性の力量などの概念である。」この考えが「孟兰变」執筆時でも変わっていなかったという確証はない。しかし、彼女が「習作」と呼んでいる初期の短編においては、いわゆる「反逆したい気持ち」は直接見出せないが、ここで列挙されている近代的な諸価値は、それらに「友情」を加えるなら、「孟兰变」の展開とともに否定されていくものとほぼ同じである。これまでの作品では、人間関係をモチーフにしなかったために、それらの価値の否定が描かれなかったのにすぎないのかもしれない。とすれば、「孟兰变」で、ようやく彼女の作品世界のほぼ全貌が現れたというこ

となのだろうか。とはいえ、まだ若い作家である。今後の作品を注目したい。

〔付録〕　孟暉作品目録

作品名		雑誌発表	出版
	夏桃	（短編）『芒種』87-7	
※	苍华	（短編）『人民文学』91-6	
※◇	蝶影	（短編）『鍾山』93-1	
※	春纱	（短編）『鍾山』94-1	
◎	有树的风景	（短編）　同上	
	千里行	（短編）　同上	
※◆□	画屏	（短編）『収穫』94-2	
	十九郎	（中編）『鍾山』98-4	
	孟兰变	（長編）　なし	作家出版社　01-1

※女性作家小説選集『世纪之门』収録

◇女性作家小説選集『女性的梦幻』収録

◎『逼近世纪末小说选』巻二　収録

◆『蔚蓝色天空的黄金——中国60年代作家小说选』収録

□『'94 中国小说精萃』収録

この他に学術的著作『中原女子服飾史稿』（作家出版社95）がある。

文　芸　報　01-1-4

我国将修改著作权法以适应入世要求

本报讯　我国立法机关近日开始审议著作权法修正案草案，旨在对现行著作权法中不符合世界贸易组织规则的有关条款作相应修改。

该草案借鉴国际上的通行做法，将现行著作权法规定的“使用权和获得报酬权”具体化为复制权、发行权、出租权、展览权、公开表演权、播放权、传播权、摄制权、改编权、翻译权和汇编权，并对每项权利的基本内涵作了界定。

修正案草案还就保护数据库等汇编作品、版式和装帧设计、合理使用等方面作出了新的具体规定。

草案加大对社会危害性较大的著作权侵权行为的行政处罚力度，除保留没收非法所得和罚款的行政处罚外，增加规定著作权行政管理部门有权没收、销毁侵权复制品；构成犯罪的，依法追究刑事责任。　（俞　铮）